日本國天皇家論
6章　日本書紀　持統天皇

近畿天皇家の始まり
九州天皇家の終焉

有名な人麿の「近江」の歌がある。

近江の荒れたる都を過ぐる時　柿本朝臣人麿の作る歌　29番歌
玉襷　畝傍の山の　橿原の　日知の御代ゆ　あれましし　神のことごと　栂の木の　いやつぎつぎに　天の下　知らしめししを　天にみつ　倭をおきて　あをによし　平山を越え　いかさまに　思ほしめせか　天離る　夷にはあれど　石走る　淡海の國の　ささなみの　大津の宮に　天の下　知らしめしけむ　天皇の　神の尊の　大宮は　此処と聞けども　大殿は　此処と言へども　春草の　茂く生ひたる　霞立ち　春日の霧れる　百磯城の　大宮處　見れば悲しも

反歌
30　ささなみの　志賀の辛崎　幸くあれど　大宮人の　船待ちかねつ
31　ささなみの　志賀の大わだ　淀むとも　昔の人に　またも逢はめやも

この歌は通常、天智天皇の都・琵琶湖近江の大津京を詠ったものと理解されてきた。歌には「橿原」「大津の宮」「志賀」「志賀の辛崎」と現在の関西で馴染みのある地名が詠いこまれている。いかに読んでも、滋賀県近江の大津の京を詠ったものだ。それ以外解釈のしようがないではないか。そのように思わせる歌である。だが、人麿が天智天皇の近江京を詠んだとすれば、なぜ、これほどまでにその廃墟に対して思い入れが深いのか。天智天皇と人麿の接点は見受けられない。人麿が天智天皇に対して親愛の念を抱いた出来事もない。人麿は天智天皇の言葉を聞いたこともないであろう。天智天皇は人麿にとって無縁の人物である。それなのに人麿は春草の生い茂る廃墟を見て、歌のような感慨をいだくことができたのであろうか。

この歌を天智天皇の近江京廃墟を詠んだものだと全ての研究者が解釈する。その理由は歌詞からである。

倭をおきて　あをによし　平山を越え　いかさまに　思ほしめせか　天離る　夷にはあれど　石走る　淡海の國の　ささなみの　大津の宮に

「倭（やまと）」から「淡海の國」へ遷都した。この歌詞は日本書紀天智天皇の近江遷都と一致する。

天智6年3月19日に、都を近江に遷す。是の時に、天下の百姓、都遷すことを願はずして、諷へ諫（あざむ）く者多し。童謡亦衆し。日日夜夜、失火の處多し。

日本書紀・天智天皇は近江に都を遷した。天下の百姓がその遷都に反対した。失火も多く発生した。斑鳩・法隆寺も全焼した。この事実は若草伽藍として発掘され、証明された。倭から都を遷したのは天智天皇だ。人麿の29番歌はこの史実を反映している。この解釈はほぼ絶対と思われた。だが、絶対と思われた解釈に一点疑問の余地がある。それは詠われている「天皇」である。天皇」とは誰か。これが歌の解釈を変える。

「天皇の神の尊」とは持統天皇

天離る　夷にはあれど　石走る　淡海の國の　ささなみの　大津の宮に　天の下　知らしめしけむ
天皇の　神の尊の　大宮は

歌全体の骨格を決める最重要の歌詞がこの部分である。「天皇」とは誰か。人麿は「天皇」を誰と想定して詠っているのか。果たして天智天皇なのか。ここに新たな認識の扉を開ける鍵が存在する。ここで人麿は「天智天皇」と具体的に詠んではいない。ただ「天皇」と詠んでいるだけである。

私たちは通常この天皇を「天智」と想定している。「近江の天皇とは天智天皇だ」という判断である。これは日本書紀に依存した認識であるが、今私たちは日本書紀を離れて、万葉集編者の認識に立ってこの歌を解析してみよう。万葉集は「藤原宮に天の下知らしめしし天皇の代」の歌として人麿の歌を載せている。そしてその最初に持統天皇の歌を紹介している。

藤原宮に天の下知らしめしし天皇の代
天皇の御製歌 28
春過ぎて　夏来るらし　白妙の　衣乾したり　天の香具山

季節は五月。若葉が美しい。持統も若葉のように若く、美しい。天の香具山の一面の緑と夏衣の白を詠んだ歌である。万葉編集者は持統の代の第一首としてまず持統本人の歌を載せた。これは当然であろう。持統の世は持統本人の歌から始めるべきである。

次が人麿の歌である。人麿は持統天皇の代に、持統天皇に仕えた歌人である。人麿の代表的な歌は持統の代に詠われた。

その人麿が歌の中で「天皇の神の尊の」と詠んでいる。人麿が特に誰とは限定しないで、ただ「天皇」と詠んだ人物とは天智天皇だろうか。そうではない。人麿が「天皇」と詠んだのは持統である。人麿がただ「天皇」と詠んだ人物は「わが君」、つまり持統である。人麿にとって天皇とは持統である。29番歌で「天皇の神の尊」と詠っ天皇とは持統天皇である。

大津の宮に持統はいた。

この歌の核心は「天皇」にある。この「天皇」を天智天皇と読むか、それとも持統天皇と読むか。それによって歌は全く変わる。この歌における人麿の感情移入は激しい。人麿が天智天皇の宮にそのような激情を抱いたとは考えにくい。人麿と天智天皇には何のつながりも記録されていない。天智天皇との接点はまるでない。ところが持統天皇には限りない信頼と親愛がある。

石走る　淡海の國の　ささなみの　大津の宮に　天の下　知らしめしけむ　天皇の　神の尊の
大宮は

「天皇」とは持統天皇である。そして「大津の宮」には持統が居た。人麿は持統を歌い、持統が居た大津の宮を歌った。しかし、歌の内容は尋常ではない。

天皇の　神の尊の　大宮は　此処と聞けども　大殿は　此処と言へども　春草の　茂く生ひた
る　霞立ち　春日の霧れる　百磯城の　大宮處　見れば悲しも

ここで人麿が詠っているのは大津宮の廃墟である。ここに持統の大宮があったと聞くけれど、春草が茂っているだけだ。ここに持統の大殿があったと言うけれど、春草が茂っているだけだ。人麿は持統が居た宮を詠った。しかし、その宮は今、廃墟となっている。これは一体どうしたことだ。持統の大津宮が廃墟となったとは。

人麿が詠った持統の「大津の宮」、この宮はどこに存在していたのか。むろん、奈良ではない。では滋賀県大津なのか。そうでもない。幸運にも日本書紀はこの宮について書いていた。

日本書紀・大津宮

日本書紀・持統紀に「大津宮」が記録されている。

日本書紀巻30　持統天皇
天命開別天皇の元年に、草壁皇子尊を大津宮に生れます。

持統紀は持統天皇が草壁皇子を産んだ宮を「大津宮」と書いている。日本書紀・大津宮と人麿が歌った大津の宮とは同じ宮である。ではその日本書紀・大津の宮はどこに存在したのか。日本文学大系日本書紀下の頭注は「筑紫の娜の大津」としている。博多港である。この特定はそれほど外れていないが、持統天皇が草陰皇子を産んだ「大津宮」は博多港ではない。

(1)　持統紀の「大津宮」と人麿29番歌の「大津の宮」は同じ宮である。
(2)　持統は「大津宮」で草壁皇子を産んだが、この宮は廃墟となった。人麿はその廃墟を詠った。
(3)　人麿は大津の宮は「倭（やまと）を離れた淡海の國」に存在すると詠った。持統が草壁を産んだ大津宮は「淡海の國」に存在した。
(4)　持統の大津の宮は「淡海の國」に存在した。

日本書紀には「大津宮」の所在を特定する説明はない。だが万葉集には「淡海の海」を詠った歌がある。

万葉　266番歌
淡海の海　夕浪千鳥　汝が鳴けば　情も思奴に　古（いにしへ）思ほゆ

人麿が266番歌で詠った「淡海の海」は九州天皇家の「淡海」である。九州天皇家の「淡海の海」とは小倉南区に広がる遠浅の海である。曽根干潟に潮が満ちてくる。すると、その海は「淡海の海」となる。この干潟をめざして多くの鳥が渡ってくる。千鳥もその一つである。人麿が詠った千鳥が今も、ここにいる。

人麿が詠った「淡海の國」とは小倉南区の干潟の海である。人麿が、「石走る　淡海の國の　ささなみの大津の宮に」と詠った「淡海」も小倉南区のささなみの海である。どちらも九州天皇家の「淡海」である。持統天皇が草壁皇子を出産した「近江・大津宮」とは小倉南区の海に面した宮であった。小倉南区に九州天皇家の伝統の宮、「大津の宮」が存在した。そこに持統天皇もいたのである。

大津宮は小倉南区の九州天皇家の大津宮

思いもかけず、人麿は九州天皇家の史実の一端を歌に残していた。

(1)　持統は「淡海の國」の「大津宮」に居た。
(2)　この宮は万葉集では「近江大津宮」と表記されている。「近江大津宮」は滋賀県・大津に存在した宮と理解されているがそれはまちがいである。万葉集で「近江大津宮」と表記する宮は北九州市小倉南区に存在した九州天皇家の宮である。その宮を「近江大津宮」と云ったのである。
(3)　持統以前の九州天皇家は北九州に実在した。その中心的な都が神武が都を開いた倭（やまと）にあった。倭（やまと）とは現在の香春・田川である。持統はその倭（やまと）を離れて、「淡海の國」の「大津宮」へ遷った。倭（やまと）から近江（おうみ）へ移った。「淡海の大津宮」とは九州天皇家の「淡海の國」における王宮であった。

では、何故この「大津の宮」が廃墟となったのか。何故、持統を最後として以後、誰も住まなくなったのか。この疑問に入っていく前に、人麿がもう一つ詠っている「吉野の大宮」を考えよう。

「吉野宮」は九州天皇家の「吉野の宮」

吉野の宮に幸しし時、柿本人麿の作る歌（万葉集巻1-36）
やすみしし　わが大王の　聞し食（め）す　天の下に　国はしも　多（さは）にあれども　山川の
清き河内と　御心を　吉野の國の　花散らふ　秋津の野辺に　宮柱　太敷（ふとし）きませば
百礒城（ももしき）の　大宮人は　船並めて　朝川渡り　船競ひ　夕川渡る　この川の　絶ゆるこ
となく　この山の　いや高知しらす　水激（たぎ）つ　滝の都は　見れど飽かぬかも

反歌
見れど飽かぬ　吉野の川の　常滑の　絶ゆることなく　またかえり見む

この36番歌は29番歌より先に作られている。万葉集の編集は作歌時期が前後している。人麿がこの歌の中で「わが大王」と詠った天皇は持統である。宮は持統天皇の宮である。この宮は「吉野の宮」と呼ばれている。

吉野に存在したから「吉野の宮」である。この吉野はどこか。通常この歌は奈良吉野の離宮を詠ったものと解釈されている。しかし、歌の情景は奈良吉野を拒絶する。奈良吉野・宮滝の川に多くの船を並べて、朝に川を渡り、夕に川を渡ることはない。奈良吉野・宮滝の離宮は「河内」にあるとはいえない。吉野川の傍にあるが、そこは「河内」と呼べるような所ではない。川幅は狭い。そんな所に船を並べてどうします。邪魔なだけである。川を渡るのに船を用いる必要は全くない。歩いて渡ることができる。石伝いに飛んで渡ることができる。

大宮人は　船並めて　朝川渡り　船競ひ　夕川渡る　この川の　絶ゆることなく

この様な情景は奈良吉野・宮滝にはありえない。夕べには船を競って川を渡る！・・・・・・・・・何を言いますか。奈良吉野・宮滝の川で何十艘もの船が競ったら大混乱しますよ。船で渡るどころか、船をかついで渡らなければなりません。奈良吉野・宮滝は船で渡る必要はない。人麿36番歌の「吉野」は奈良吉野ではない。奈良吉野の宮は離宮であるが、36番歌の持統の宮は「大宮」と詠われている。「大宮」とは政庁としての大宮の意である。故に多くの大宮人が朝出仕して、夕方帰ったのである。歌はその情景である。この情景は船遊びではない。公務である。公務の通勤手段が船だったのである。

人麿歌には「吉野の大宮」の存在場所を明らかにする特異な表現が詠われている。

水激（たぎ）つ　滝の都

この言葉が場所確定の決め手となった。当初、この意味が分からなくて随分悩んだものでした。「滝」を普通の「滝」、山から流れ落ちる滝と考えていた。だが、「滝」とは「たぎ」で、その意味は「逆巻く水」のことだった。「逆巻く水」とは、川に潮が押し寄せて、川の水が逆巻いて流れる現象のことである。その現象は竹馬川の河口に見られる。周防灘の満ち潮が押し寄せて、竹馬川の流れが逆巻く。持統の「吉野の宮」は小倉南区・竹馬川の河口に存在した。この宮は九州天皇家の大宮であった。

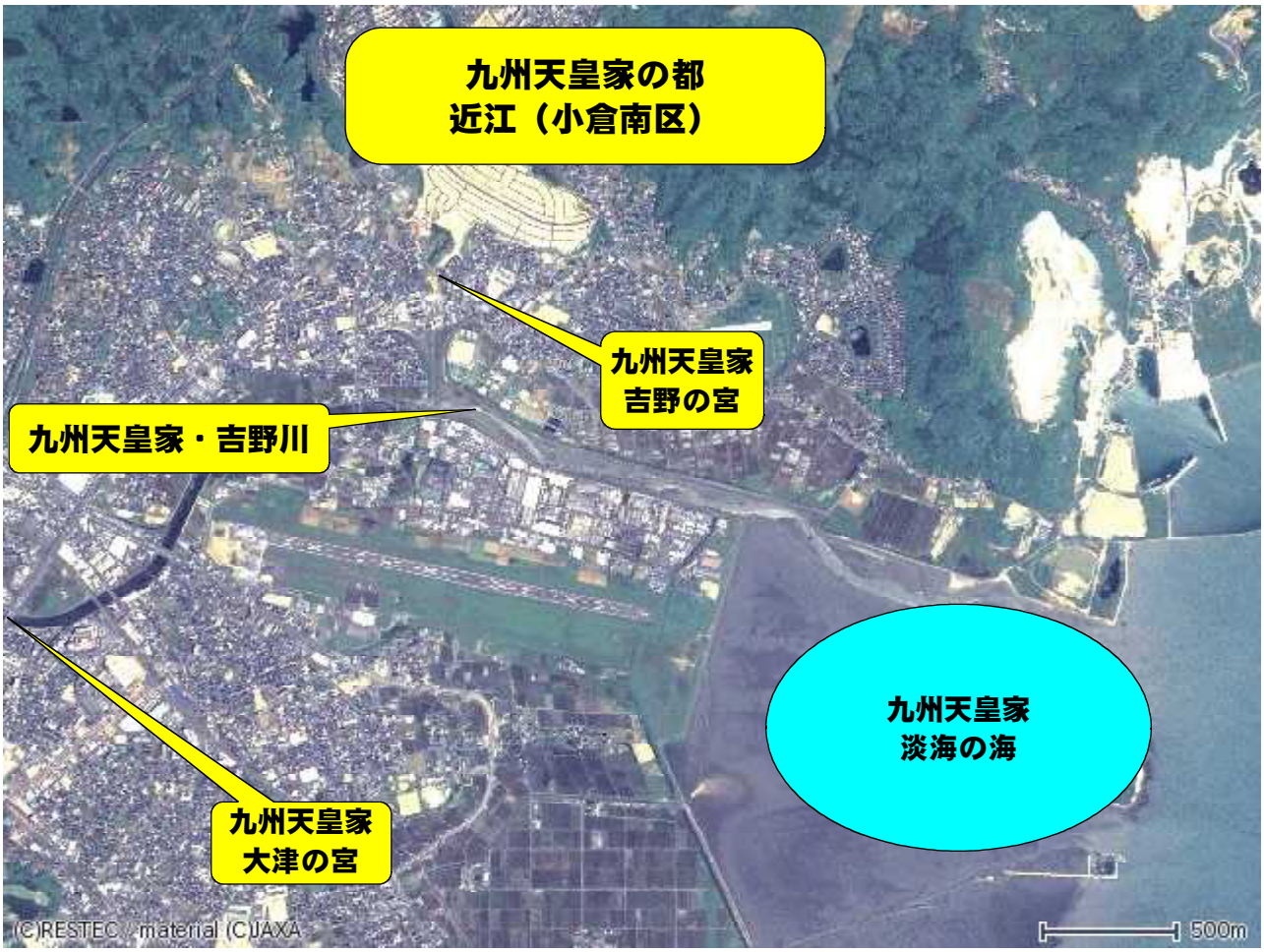
百礒城（ももしき）の　大宮人は　船並めて　朝川渡り　船競ひ　夕川渡る　この川の　絶ゆるこ
となく　この山の　いや高知しらす　水激（たぎ）つ　滝の都は　見れど飽かぬかも

反歌
見れど飽かぬ　吉野の川の　常滑の　絶ゆることなく　またかえり見む

持統王朝の人々はこの大宮に船で通っていた。曽根の海を朝に、夕に、多くの船が賑やかに行き来した。九州天皇家の都がある盆地の倭（田川市・香春町）と異なり、曽根の淡海に面した華やかな、晴れやかな大宮だった。人麿はこの大宮を誇らしく歌い上げている。

この川の　絶ゆることなく　この山の　いや高知しらす　水激（たぎ）つ　滝の都は　見れど飽かぬかも

人麿がこのように詠った「吉野の宮」は小倉南区に存在した九州天皇家の大宮である。小倉南区には「吉野宮」と「大津宮」の二つの宮が存在した。



近江大津の宮の廃墟・・・九州天皇家終焉の象徴

九州天皇家の「淡海の國」とは小倉南区である。ここに九州天皇家の大宮が存在した。持統はこの宮で草壁皇子を出産した。ところがこの大宮は廃墟となった。その理由は古代最大の内戦－壬申の乱が深くかかわる。

壬申の乱で勝利した天武は天皇に即位した。九州天皇家が日本國天皇家に代わって日本の支配者となった。天武はその権力を太宰府に置き、全国統治した。その天武が686年に亡くなった。しかし継承すべき皇太子草壁がいる。安心も束の間、草壁皇子も689年に亡くなった。統一国家建設の大事業は全て持統の双肩にかかっていた。そこで持統はある決心をする。

> 私は天武の新国家建設の事業を継承するために、日本國の藤原京に戻ろう。小倉南区の伝統の大津の宮、九州天皇家の栄光の大津宮、川が逆巻き流れ、北九州随一の景勝地、小倉南区の淡海に建てられた大宮。この大津宮を訪れることはもうあるまい。

持統3年（689）草壁皇子の死の翌年、持統は藤原京に遷っていった。そして二度と九州には帰ることはなかった。小倉南区の淡海の大津宮は主をなくしてしまった。大津宮はだれも住まない廃墟となった。人麿はこの状況を詠嘆したのである。

人麿には大津の宮の華やかな情景が浮かんでいる。朝に、夕に、淡海を渡った大宮人の姿が蘇っている。

志賀の辛崎は昔と変わらないけれど、いくら待ってもあの頃のように、大宮人たちが船に乗って家に帰っていくことはもうないのだ。「志賀の辛崎」は大宮人の船乗り場だった。大津の宮にいた持統天皇はもうここにはいない。持統天皇は遠い國の京に去ってしまった。持統王朝の人々も遠い藤原京に移っていってしまった。もはやここに九州天皇家の人々は誰もいない。志賀の辛崎の船乗り場には潮が十分満ちて、船を容易に浮かべることができるのに、もう大宮人が船に乗りこむことはない。再び昔の九州天皇家の大宮人に会うことができようか。もうできはしないのだ。

反歌
30　ささなみの　志賀の辛崎　幸くあれど　大宮人の　船待ちかねつ
31　ささなみの　志賀の大わだ　淀むとも　昔の人に　またも逢はめやも

「淀む」とは水の流れがとどこおるの意である。なぜ「志賀の大わだ」は水が淀んだり、或いはその反対に水が引いたりするような水の流れが生じるのか。小倉南区の淡海は満ち潮と引き潮によってその姿が完全にかわる。引き潮の時には船が出せない。だが満ち潮の時には船が出せる。その時をねらって大宮人は船に乗った。今、志賀の大わだの船乗り場には潮が満ちて船が出せる時となった。だが、昔のように船に乗る人は誰もいない。もう九州天皇家の人には誰にも逢うことはできない。

志賀の辛崎

志賀は九州天皇家の志賀、小倉南区である。人麿が反歌で詠った「ささなみの志賀」はこの歌で初めて登場するのではない。すでに日本書紀・景行紀にあらわれている。

・景行4年冬11月の朔に乗輿、美濃より還ります。則ち更纒向に都つくる。是を日代宮と謂す。
・景行12年9月、天皇、遂に筑紫に幸して、豊前國の長峡縣に到りて、行宮を興てて居します。故、其の処を号け、京と曰ふ。
・景行12年11月に、日向國に到りて、行宮を起てて居します。是を高屋宮と謂す。
・景行53年12月に、東國より還りて、伊勢に居します。是を綺宮と謂す。
・景行54年の秋9月19日に伊勢より倭に還りて纒向宮に居します。
・景行58年の春2月11日に、近江國に幸して、志賀に居しますこと三歳。是を高穴穂宮と謂す。
・景行60年冬11月7日に、天皇、高穴穂宮に崩りましぬ。時に年106歳。

景行が宮を作った國、美濃とは九州天皇家の美濃、苅田町である。「倭（やまと）の纒向の宮」は田川市にあった。「豊前國の長峡縣」とは行橋市を流れる長峡川の上流みやこ町である。「日向國」は小倉北区である。「伊勢」は行橋市である。近江國の志賀にあったのが高穴穂宮である。

人麿が　「天皇の　神の尊の　大宮は」と詠った持統の大津宮は近江（淡海）に存在した。景行天皇も近江國の志賀に宮を造り、そこで亡くなった。持統の近江志賀の大津宮と景行の近江志賀の高穴穂宮はほぼ同じ場所に存在した。景行の次の天皇は成務である。

若帯日子天皇、近淡海の志賀の高穴穂宮に坐しまして、天の下治らしめしき。（古事記中巻）

古事記は成務もまた近淡海の志賀の高穴穂宮で天下を治めたと述べている。ここでは古事記、日本書紀とも同じ認識に基づいて記事が書かれている。景行、成務、天智、持統と九州天皇家の王宮が近江（淡海）の志賀に存在した。この近江・志賀とは小倉南区である。

「近江の荒れたる都」とは九州天皇家の近江の都

「近江の荒れたる都」とは九州天皇家の都、小倉南区の近江である。人麿はかって持統が住んだ大津宮の荒廃を詠んだ。人麿が見た「大津の宮」は九州天皇家の近江國（小倉南区）の大津宮だった。

滋賀県・近江京は日本國天皇家の京である。人麿は持統朝の歌人である。天武の死後、持統は奈良藤原京に戻り、即位した。近畿天皇家がここに始まる。その繁栄の陰で衰退していったのが神武以来の九州天皇家の国々である。主を失った九州天皇家の都（香春・田川）、淡海の國（小倉南区）は往事の栄光と栄華をなくしていった。その滅び行くあわれを人麿は詠ったのである。人麿の近江の廃墟の歌は歴史から消えゆく九州天皇家の鎮魂歌である。

滋賀県大津宮遺跡

滋賀県大津宮遺跡は大津市錦織（にしごおり）二丁目にある。京阪電車・近江神宮駅から徒歩五分くらいの住宅地の中にある。現在は住宅地であるが、地形は山裾で平らな土地ではない。遺跡は第一地点から第九地点に分散し、また道路が縦断しているため全体像は見えにくい。錦織遺跡の東側は琵琶湖で古代は遺跡のすぐ傍まで琵琶湖が来ていたと思われる。

30番歌で詠われた「辛崎」は「唐崎」と文字を変えて遺跡の北方にある。 だが、錦織遺跡に存在した大宮の場合、大宮人が船を使わなけれならない理由がない。船で琵琶湖を渡る理由がない。大津京駅の近くに住んでいたにせよ、唐崎の近くに住んでいたにせよ、船は必要ない。徒歩で十分である。遺跡には人麿29番歌の歌碑が立てられている。しかし、人麿はこの遺跡を詠ったのではない。この遺跡と人麿は全く無縁である。

霞立ち　春日の霧れる　百磯城の　大宮處　見れば　悲しも

人麿が悲しんだ廃墟は持統天皇が住んでいた九州天皇家の大津の宮である。滋賀県大津の宮には持統天皇は住んではいない。この歌碑は残念ながら場違いである。

錦織遺跡第一地点辺り

唐崎
近江大津宮
錦織遺跡
三宅八幡
ケーブル比叡
比叡山
滋賀県
紀貫之墓
修学院山添町
赤山禅院
林丘寺
穴太
唐崎
滋賀里町乙
乗寺堀ノ内町
詩仙堂丈山寺
山中町
崇福寺跡
滋賀里
琵琶湖
北白川天然
ラジウム温泉
田の谷峠
田ノ谷峠
南滋賀
陸上自衛隊
大津駐屯地
北白川
鹿ケ谷大黒谷町
比叡平
錦織町
近江神宮前
(銀閣寺)
楽寺
皇子山CC
大津京
皇子山
如意ケ岳
大津市役所
国城寺町
浜大津
島ノ関
琵琶湖
サンシャインビーチ
四ノ宮新開
京都市
上栄町
滋賀県庁
石場
大津
御陵黒岩
膳所
大津
東海道本線
(C)Yahoo Japan (C)ZENRIN
1km

大意

玉襷　畝傍の山の　橿原の　日知の御代ゆ　あれましし　神のことごと　栂の木の　いやつぎ

九州天皇家の始祖、神武の御代から歌い始めている。神武が都を作った地は香春岳（畝傍山）が見下ろす橿原（香春町高野）だった。畝傍の山は畑の「畝」の形をしているので「畝傍山」なのである。九州香春町の香春岳が「畝傍の山」である。神武以来、九州天皇の名山である。

倭（やまと）をおきて　あをによし　平山を越え　いかさまに　思ほしめせか　天離る　夷にはあれど　石走る　淡海の國の　ささなみの　大津の宮に

「倭」とは本来は「倭（キ）」と読むべきであろう。魏志倭人伝に紹介される「倭人」の「倭」である。神武が侵入した古代国家は熊襲が支配する「倭國」であった。この「倭國」は「赤銅の八十梟師」が統治する国、銅を産出する國、香春町であった。香春二ノ岳は銅山である。「赤銅八十梟師」はこの國の王であった。神武紀における「倭（やまと）國」とは香春町・田川市である。人麿の歌もこの史実に基づいている。

「平山」とは、この山を踏んで「平（なら）した」という故事に由来する名前である。「奈良山」と書いても同じ意味である。「あをによし」は「紅葉の美しい」という意である。仁徳皇后が詠ってよく知られている。人麿は持統天皇が「倭（やまと）」を出て、「平山」を超え、「淡海の國の大津の宮」へ出てきたと詠う。

石走る　淡海の國の　ささなみの　大津の宮に　天の下知らしめしけむ　天皇の　神の尊の　大宮は　此処と　聞けども　大殿は　此処と　言へども　春草の　茂く生ひたる　霞立ち　春日の霧れる

通常、「淡海」は琵琶湖と解釈される。故に人麿は滋賀県・近江を詠ったと考えられてきたが、人麿が「淡海」と詠った海は琵琶湖ではない。小倉南区・曽根の海が淡海の海である。この海はまさに「淡の海」である。ここに持統がいた大津の宮があった。しかし、この宮は持統によって建造されたものではない。この宮は九州天皇家の伝統の大宮であった。

近江にはもう一つ「吉野の宮」も存在した。壬申の乱前夜、天武が「吉野の宮」に入ったと日本書紀が伝えるのは小倉南区の「吉野の宮」である。人麿は「持統の宮」と詠ったが、この宮も九州天皇家代々の大宮であった。

天皇の　神の尊の　大宮は　此処と聞けども　大殿は　此処と言へども　春草の　茂く生ひたる　霞立ち　春日の　霧れる　百磯城の　大宮處　見れば悲しも

九州天皇家伝統の大宮が「近江大津宮」であった。「近江天皇」も天武天皇も持統天皇もこの大宮で、「天の下知らしめしけむ」、天の下を統治した。しかし、持統天皇を最後として、この大宮は廃墟となった。

なぜか。持統がこの地を去ったからである。持統は天武が亡くなったのち、太宰府で統治していた。やがて草壁皇子は即位するだろう。その希望は草壁皇子の死によって消える。ここで、持統は決断する。九州を去る。父の國、日本國に戻り、そして即位しよう。

持統は九州を去り、奈良藤原京に戻った。持統と共に、九州天皇家の大宮人も遠い奈良に移ってしまった。もはや、九州天皇家のこの大津宮に住む人は誰もいない。霞が立ち、うららかな春なのに・・・・・春草のみが生い茂る。

大宮は　此処と聞けども　大殿は　此処と言へども　春草の　茂く生ひたる　霞立ち　春日の　霧れる　百磯城の　大宮處　見れば悲しも

私たちにはこの風景が人麿自身の心象風景と重なって見える。人麿は持統の代に九州天皇家の「讃岐國」に流されたと伝わる。人麿は奈良には移らず、九州に残された。その人麿が見たのが九州天皇家の伝統の大宮、近江大津の宮の廃墟だった。人麿は九州天皇家の終焉を哀しみ、また、自身を悲しんで詠っているように見える。

「近江大津宮」の天皇は九州天皇家

万葉集第二巻には相聞歌・挽歌が収められている。相聞56首は、「難波高津宮御宇天皇の代」、「近江大津宮御宇天皇の代」、「明日香御清原宮御宇天皇の代」、「藤原宮御宇天皇の代」の歌である。

挽歌94首は、「後岡本宮御宇天皇の代」、「近江大津宮御宇天皇の代」、「明日香御清原宮御宇天皇の代」「藤原宮御宇天皇の代」である。

相聞・挽歌はどちらも、「近江大津宮の天皇」「明日香御清原宮の天皇」「藤原宮の天皇」の三代を軸に編纂されている。「明日香御清原宮」は天武天皇、「藤原宮」は持統天皇である。問題は「近江大津宮の天皇」である。「近江大津宮」の天皇の代の挽歌は全部で九首ある。

近江大津宮に天の下知らしめしし天皇の代

天皇聖躬不豫の時、大后の奉る御歌一首

147　天の原　振り放け見れば　大君の　御寿は長く　天足らしたり

一書に曰はく、近江天皇、聖躬不豫御病気急かなる時、大后の奉献る御歌一首

148　青旗の　木幡の上を　かよふとは　目にも見れども　直に逢はぬかも

天皇崩りましし後、倭大后の作りましし御歌一首

149　人はよし　思ひ止むとも　玉蔓　影に見えつつ　忘らえぬかも

天皇崩りましし時、婦人が作る歌一首

150　うつせみし　神に　堪へねば　離り居て　朝嘆く君　わが恋うる君　王ならば　手に巻き持ちて　衣ならば　脱く時もなく　わが恋ふる　君そ昨の夜　夢に見えつる

天皇の大殯の時の歌二首

151　かからむの　懐知りせば　大御船　泊てし泊りに　標結はましを

152　やすみしし　わご大君の　大御船　待ちか恋ふらむ　志賀の辛崎

大后の御歌一首

153　鯨魚取り　淡海の海を　沖放けて　漕ぎ来る船　邊附きて　漕ぎ来る船　沖つ櫂　いたくな　撥ねそ　邊つ櫂　いたくな撥ねそ　若草の　夫の　思ふ鳥立つ

石川夫人の歌一首

154　ささ浪の　大山守は　誰がためか　山に標結ふ　君もあらなくに

山科の御陵より退き散くる時、額田王の作る歌一首

155　やすみしし　わご大君の　かしこきや　御陵仕ふる　山科の　鏡の山に　夜はも　夜のことごと　晝はも　日のことごと　哭のみを　泣きつつ在りてや　百磯城の　大宮人は　去り別れなむ

「近江大津宮」とはどこに存在したか。問題はこの一点にある。日本國天皇家の大津（滋賀県大津）か、それとも、人麿が29番歌で詠った九州天皇家の大津（小倉南区）か。その答えはそれほど難しくない。人麿29番歌の反歌30・31に詠われた地名が152番歌に詠われている。それは「辛崎」である。

近江大津宮は小倉南区の近江大津宮

152　やすみしし　わご大君の　大御船　待ちか恋ふらむ　志賀の辛崎

30　ささなみの　志賀の辛崎　幸くあれど　大宮人の　船待ちかねつ

31　ささなみの　志賀の大わだ　淀むとも　昔の人に　またも逢はめやも

この三つの歌には「志賀」「志賀の辛崎」が詠われている。

152番歌：「志賀の辛崎」は大君の船が泊まっている湊である。近江天皇の船は「志賀の辛崎」に繋留してあった。

30番歌：「志賀の辛崎」は大宮人を待つ船の湊である。

31番歌:「志賀の大わだ」とは水が淀んだ所の意である。水が淀むとは満潮で潮が押し寄せて、船が出入りできるようになることである。

三つの歌に詠われた「志賀」は同じ湊である。小倉南区に存在した九州天皇家の「近江の國」の湊である。

二つの辛崎

ここで、人麿は「辛崎」は「志賀の辛崎である」と断っている。他にも「辛崎」があるよ。この「辛崎」は「志賀」の「辛崎」だよ。このように限定している。実は「辛崎」はもう一つあった。それは「石見國の辛崎」である。

万葉　135番歌
つのさはふ　石見の海の　言さへく　韓の崎なる　海石にそ　深海松生ふる　荒磯にそ　玉藻なす　靡き寝し兒を　深海松の　深めて思へど　さ寝し夜は　いくだもあらず　這ふ蔓の　別れし来れば　肝向ふ　心を痛み　思ひつつ　かへりみすれど　大船の　渡りの山の　黄葉の　散りの亂ひに　妹が袖　さやにも見えず　嬬隠る　屋上の山の　雲間より　渡らふ月の　惜しけれど　隠ろひ来れば　天つたふ　入日さしぬれ　大夫と　思へるわれも　敷栲の　衣の袖は　通りて濡れね

大意
石見の海の韓の崎にある海石に深海松は生え、荒磯に玉藻は生える。その玉藻のように靡いて寝た妻を心に深く思うけれども、共に寝た夜はいくらもなく別れてきたので、心痛さにあれこれ思いおこして振り返って見ても、渡りの山の黄葉が散り乱れているので、妻の振る袖もはっきり見えもせず、惜しいけれども隠れて見えなくなってくるその時に、ちょうど入日がさして来たので、立派な男子と思っている自分も、衣の袖は涙で濡れてしまった。
（日本文学大系万葉集巻2　頭注）

人麿が石見國から妻と別れて上る時の歌である。原文は「辛乃崎有」である。つまり「辛崎」である。「韓の崎」と訳しているので「辛崎」ではないと思うが、原文通り、「辛崎」と読む。

すると、この辛崎は「石見の海の辛崎」である。九州天皇家の「石見國」とは苅田町である。小倉南区の「近江」に「辛崎」があった。そして、苅田町の「石見の海」にも辛崎があった。「淡海の海・辛崎」と「石見の海・辛崎」の二つ存在したのである。そこで、小倉南区の辛崎は「志賀の辛崎」だよ、と限定したのである。なお「辛崎」は本来の表記は「韓崎」であろう。亦は、風土記伊賀國が伝える「加羅崎」であろう。

近江大津宮とは九州天皇家の淡海の國の大宮

(1)　万葉挽歌・近江大津宮とは人麿29番歌で詠われた持統・大津宮と同じ九州天皇家の宮である。
(2)　持統・大津の宮は九州天皇家の「淡海國」、現在の小倉南区長野に存在した。
(3)　近江大津宮の天皇の大津宮は持統天皇の「淡海の國」の大津宮と同じである。
(4)　近江天皇も持統も小倉南区の九州天皇家の大津宮に居た。
(5)　九州天皇家の都は倭（やまと・香春町・田川市）にあった。もう一つの都が近江に存在した。九州天皇家は山の国・倭（やまと）と海の国・淡海の國と彦島の連合国家であった。淡海の國には「大津宮」と「吉野の宮」が存在した。彦島には「橘の宮」が存在した。いずれも九州天皇家伝統の大宮である。
(6)　近江天皇は淡海（近江）の大津宮に居た。天武もまた大津宮にいた。そして持統もまた大津宮にいた。

近江天皇は小倉南区の近江大津宮に居た

「近江大津宮に天の下知らしめしし天皇」とは日本書紀天智天皇ではない。近江天皇江とは九州天皇家の近江の大津宮にいた九州天皇家の天皇である。日本書紀天智天皇は琵琶湖・大津に都を遷した。しかし、近江天皇と呼ばれたことは亡い。九州天皇家の近江天皇は九州天皇家の近江（小倉南区）にいた天皇で、天智と呼ばれたことはない。二人は別人である。

九州天皇家の近江天皇は小倉南区・大津宮に居た。この天皇はいつ亡くなったのであろうか。若くして亡くなったかと思える。大后は次のように詠んでいる。

大后の御歌一首

153　鯨魚取り　淡海の海を　沖放けて　漕ぎ来る船　邊附きて　漕ぎ来る船　沖つ櫂
いたくな撥ねそ　邊つ櫂　いたくな撥ねそ　若草の　嬬の　思ふ鳥立つ

大意

捕鯨の船。淡海の沖辺から漕いで来る舟よ。岸辺について漕いで来る舟よ。沖の櫂をひどく撥ねないでおくれ。岸辺の船よ。櫂をひどく撥ねないでおくれ。若い嬬がかわいがっていた鳥が驚いて飛び立つから。

原文では「嬬」である。天皇の若い妻という意味となろう。九州天皇家の近江天皇は夭逝したのであろうか。老死ではない歌の響きである。なお歌の冒頭の「鯨魚」は鯨である。単なる枕詞ではなく、実際の鯨を意味する。「淡海の海」で鯨が捕れた。九州天皇家の「淡海の海」の沖は周防灘である。行橋市に沓尾という岬があり、その先端に沓尾漁港があるが、明治36年ここに「鯨塚」が地元漁師によって建てられた。周防灘では鯨が捕れたのである。

151　かからむの　懐知りせば　大御船　泊てし泊りに　標結はましを

こうなるだろうと前から分かっているのだったら、天皇のお乗りになっていた舟の泊まった港にシメを結って、大御舟をとどめて、天皇が天路へ旅立たれないようにするのだったのに。（文学大系万葉集頭注151）

この歌も近江天皇の思いがけない死を詠っているようである。死を予測していなかった歌である。やり手の弟、天武との額田王を巡る恋いの悩みを詠った九州天皇家の近江天皇は天皇になって程なく亡くなったのではないだろうか。そして山科の鏡山に埋葬された。

香春町・鏡山古墳は九州天皇家、近江天皇陵

山科の御陵より退き散くる時、額田王の作る歌一首

155　やすみしし　わご大君の　かしこきや　御陵仕ふる　山科の　鏡の山に　夜はも　夜の　ことごと
晝はも　日のことごと　哭のみを　泣きつつ在りてや　百磯城の　大宮人は　去り別れなむ

「近江大津宮」に居た天皇は九州天皇家の天皇である。近江天皇は「山科の鏡山」に埋葬されたと詠われている。通常、この古墳は京都山科の古墳と解釈されているが、近江天皇が居たのは小倉南区・大津宮である。その陵も関西ではない。京都山科陵は日本國天皇天智の陵である。

九州天皇家・天智の鏡山陵はどこに存在するか。「鏡山」と名の付く古墳が香春町に存在する。香春の鏡山は、陵が手鏡の形をしているから鏡山という名前なのである。古墳の北側の集落は代々この古墳を守ってきたと伝わる。それほどの古墳でありながら、この古墳の被葬者は明らかではない。この古墳が九州天皇家、近江天皇の鏡山陵である。

太宰府率、河内王の墓

この鏡山に埋葬されたという人物がいる。太宰府率河内王である。万葉集に詠われている。

河内王を豊前國鏡山に葬る時、手持女王の作る歌三首
417　王の　親魄逢へや　豊國の　鏡山を　宮とさだむる
418　豊國の　鏡山の　石戸立て　隠りにけらし　待てど来まさず
419　石戸破る　手力もがも　手弱き　女にしあれば　術の知らなく

河内王は豊國の鏡山に埋葬された。それが香春の鏡山古墳である。河内王は持統3年、太宰師に任命された。鏡山の被葬者は河内王だと錯覚してしまう歌である。ところが河内王の墓は古墳の傍にある。古墳と比べてあまりにも小さいのでびっくりする。